
星のカービィ ある1年

arutema

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星のカービィ ある1年

【Nコード】

N2867I

【作者名】

arutema

【あらすじ】

カービィとその仲間による話です。内容などはほとんど考えていませんが、一生懸命やらせていただきます。よろしくお願いします。

第1話：新学年

ここはあきれかえる程平和な国・ププランド。

「ふあゝああ：やだなあ：」

いきなりネガティブシンキングをしているこのピンク色の物体の名前はカービィ。最大の特徴はさっき述べた通り、全身のピンク色と球形であるということだ。

「なんかひどい説明…」

「カービィさん！早くしないと遅れるよ！」

「えゝ…」

カービィの家のドアが大きな音を立てて開かれ、似た形が飛び込んできた。

「ワドルディ：そんなに急がなくてもいいでしょ？まだ6時56分じゃん。今日は10時に行けばいいんでしょ？」

2人は現在、現実世界で言う小学4年生になったばかり。今日は始業式なのだ。

「あ！時計が逆さま！ほら、反転させて！」

「え？9時29分！？」

時計が逆さまになってそのままにいるのには疑問符がつくが、いろいろな物で支えられていたようだ。
例えば、ガラクタやガラクタやガラクタである。

「少しは片付けたほうがいいっスよ」

「ス」というのはワドルデイの口癖だ。

「はいはい」

「さ、準備できたっスか？」

「あ、うん」

「じゃあ、行くっスよ！」

「あ、待ってよう！」

いつもの日々がまた始まる。と思いきや、いつもよりとんでもないことになるとは、このときは誰も予想できなかったことである。

学校にて。

「皆、今日は始業式です。ちゃんと起きれましたか？」

先生が児童にいろいろ言う。やはり聞く側が小学生ということで、大半は先生の話を聞いていた。ちなみに、カービィとワドルディは同じクラスである。

「…では、これで終わります」

朝礼が終わり、全校一同は体育館へ。

…が。

「…あれ？」

「どしたっスか？」

「いや…寝てるのかな？あの子」

一人、机に伏している人がいた。

「…なんか嫌な予感がするんすけど…」

「…」

カービィはその人に歩み寄った。ワドルディは近付かない。教室のドアで2人を見ていた。

「どうしたの？」

「…え？ま、まだ残ってたの？」

それはこっちのセリフだ！と言いたくなるのをこらえて、改めて言い直す。

「体育館行こうよ。始業式、始まっちゃうよ」

「あ、はい…そうですね」

が、なぜかまだ伏せたままだ。びくともしない。

「おい」

たまらなくなったカービィは、肩に手を置いた。

「ほら！」

「…！」

「あの…先に行ってください…後から行きますから」

「…そう？」

カービーとワドルディは、それを聞いてから体育館へ急いだのだった。

この登校初日、いきなりこの人物が事件を起こすことになるとは、二人は想像すらしなかったことであつた…。

次回へ続く。

第2話：本格始動（前書き）

まさかこっちで感想をいただけるとは思いませんでした！ありがとうございます！

他の皆さんも、よかったらお願いしますね！
では：1ヶ月ぶり？の第2話です。

第2話…本格始動

「ああ…だるい…」

「カービィさん、ちゃんとするっス！」

始業式。カービィは聞き飽きたと言わんばかりにふらふらしていた。さすがに抜け出したりはしないが、結構態度は悪い。

「校長先生の話って、なんでこんなに長いんだろう…」

「カービィさん！オイラはカービィさんの保護者じゃないんスよ！」

「うう…早く終わらないかな…」

「…であるからして…」

長々と続いた始業式がようやく終わり、カービィはそそくさと教室に戻った。

「まったく、しょうがないな、あいつも」

「あ、ピッチ」

取り残されたワドルディが後ろを振り返ると、そこには小鳥のピッチが立っていた。ちなみに3人(?)は幼馴染みだったりする。

「なんとかならないっスカね？」

「さあな。まああいつの本性だし、無理だろ」

あっさり言い放つピッチ。ワドルディは呆然とするしかなかった。

「…そうっスカねえ…」

一言そう呟いた。

「やっと終わったあ！」

本日一番明るい笑顔を見せるカービィ。こんなときにしか笑えないのは、やはり非常に空しい。

「おい、ピッチ！」

「なんだ？」

「今日は練習するの？」

「…ああ、時間があればな」

3人が教室に戻る。

「あっ…さっきの…」

「ど、どうも…その、さっきは心配してもらってありがとうございます…」

「えっ？ いや、別に大したことじゃ…」

（おいワドルデイ、誰だこいつ？）

（さあ…なんか気付いたらカービィさんが話し始めてて…）

（ふーん…）

「それにしても戻るの早いねえ」

「あっ…それは…」

実は行っていないなどとは言えない。

「い、急いで戻ったんですよ。ほら、なんでも早いに越したことはないじゃないですか」

「まあ…そうなのかな？」

そのとき、ピッチは気付いていた。カービーが話しかけている相手の目がおかしいことに。

（ワドルデイ、あいつ、なんか様子が変わだ）

（は？）

（襲うとか、そういう意味じゃないが…目の周りをよく見ろ）

（あっ…赤いっスね…）

（…オレ、詳しく話を聞く）「あの…君」

「あ、はい？」

「その…」

「よし、学活始めるぞ！」

学級活動すなわち学活。要するに今回は新学年になった当初にいろいろやるやつだ。

「まず始めに、皆に自己紹介をしてもらおうか！」

定番のアレから始まった。それぞれどんな感じになったかというと…

「…よし、次！」

「出席番号8番・趣味はソフトテニスのカービィです！」

（あいつ…出席番号言う必要ねえだろ）

微笑むピッチ。

「ほお、ソフトテニスか。ちなみに、どのくらい上手いのかな？」

「ワドルディには負けません！」

「えっ？カービィさん、そこでオイラに振るっスか！？」

教室内が笑いに包まれる。

「よし、次！」

「ピッチです。よろしく」

「もう少ししないかな？」

「えーっと…カービィとワドルディと同じでソフトテニスやってます。カービィ相手には不敗伝説を築いてて…」

少しと言ったのが、ものすごく長くなりそうだ。

「あ…後にももらえるかな？終わるまで回らなくなるから」

「あ…すいません」

恥ずかしさで顔を伏せるピッチ。そして、再び笑いが起こる。

「次！あと2人か」

「あ…リボンです。えっと…趣味は料理です」

と、そこでなぜか周りからはクスクス声。

「はーい、静かに！じゃあ最後…なんだかんだで君、一番印象に残ったよ」

「なんスかそれ！」

最後の最後に一番大きな笑いが湧き起こった。

「よし、じゃあ…」

その後、普通に淡々と進み、解散となった。

「君…リボンちゃんっていうんスね」

後ろの席のワドルデイがリボンと名乗った少女に声をかける。ちなみに、さっきカービィが話しかけた相手と同じ人物だ。

「…は、はい」

「なんか悪いっスね、カービィさんが迷惑を…」

「いえ、そんな迷惑なんて…」

「多分リボンさんが一人だったのが心配だったんだと思うんスよ」

「…」

リボンと名乗った少女は、目線を落とす。

「あ、そういえば、ピッチが何か聞きたいことがあるって言ったっスよね？」

「ああ」

「うわっ！いつの間に！」

いつの間にかワドルデイの後ろにいたピッチが口を開いた。

「あの、なんですか？」

「あなた…もしかして、リップルスター…出身ですか？」

「！」

リボンの表情が変わった。固いものになる。

「リップルスター…？」

「ああ。ここから数十万k m離れたところにある、妖精だけが住む場所だ」

「…はい」

リボンは頷く。

「なるほど…だからか…」

「何？何？」

カービィも話に加わった。

「話して…いい？」

「…私から話をさせてください」

「えっ…でも…」

「いいんです、大丈夫ですから。」

そう言うと、リボンはゆっくり話し始めた。

「リップルスターは、周りから見ればいい場所です。景色はきれいだし、皆、親切なときは本当によくしてくれたりして…でも、そこにいるためには、厳しい条件があるんです」

「つまり…その条件を満たすことができなかったから、今ここにいるの？」

「…」

頷くだけである。

「皆そのことが分かってるんですよ。だからあのとき…私が自己紹介したとき、皆さんが笑っていたんです」

「それは…」

「ええ…簡単に言えば、私…落ちこぼれなんです」

「「…」」

「じゃあ…両親は？」

「今は…リップルスターにいます」

「なんでこっちじゃないんだ？」

「…来るのを禁止されているから…」

「…」

3人は黙り込んでしまう。つまり今、リボンはこれから起こるであろうことに、たった一人で耐えていかなければならないのだ。

「…リボンちゃん」

「はい…？」

「…友達になろう！」

「えっ…でも…皆さんにも迷惑を…」

「そんなことないよ！僕達だって、新しい友達ができたら嬉しいよ！」

「…」

リボンは3人を見回す。

（やっちゃったなあ…） 「それじゃあ…よろしくお願いします！」

7割の希望、2割の不安、そして…1割のある気持ちを含めて、そう言った。

自然と3人も笑顔になった。

「うん！よろしくね！」

この瞬間、3人の周りで新たな物語が始まった…。

第2話：本格始動（後書き）

今後もかなり長い間が空くと思いますが、見ていただけると嬉しいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2867i/>

星のカービィ ある1年

2010年10月8日23時47分発行